

トランスジェンダーのリアル

パネル展



出生時にわりあてられた性別とは異なる性別のアイデンティティ

(自分は何者である、という一貫した

自己・自我の意識)を持つ人を

トランスジェンダーといいます。

「あなたの性別は何ですか？」

そう聞かれた時に、

生まれた時にわりあてられた性別とは異なる答えを口にするのは、

今の社会ではまだ容易なことではありません。

信じてもらえないことがあります。

ばかにされることもあります。

大変なこともあります。楽しいこともあります。

このパネルは

トランスジェンダーのリアル(実際の姿)を知ってもらうために、

トランスジェンダー5人のパーソナル・ストーリーと、

基礎知識の解説を添えました。

私たちのそれぞれに物語があること、

物語は多様であることを、ぜひ味わってみてください。

学校、職場、地域社会の中で、

私たちはすでに

みなさんと一緒に生きています。

なお、このパネル展のもとになった

冊子「トランスジェンダーのリアル」は現在、

全国の自治体や教育機関に配布されています。

冊子について詳しく知りたい方は

こちらのホームページもご覧ください。



<https://tgbooklet.wordpress.com/>

白

分の体に違和感がある人なんだろうと周りからはいつも思われてきました。

でも私は自分の体の性別に関わる特徴をそんなに嫌だと思っていない。私が嫌なのは、私の体のあり方によって、私のアイデンティティが否定され、女性の枠に押し込めようとすることです。

私が生まれた時につけられた性別は女性で、自分が女の子に割り当てられていること、女の子だったら「普通」どんな服装や振る舞いをする事になっっているのかを6歳になる頃にはもうわかっていました。そして、自分のことをち

っとも女だと思わないことも、女の子扱いされたり、女の子らしくすることを押し付けられたりするのはいさぐく嫌だということもわかっていました。

でも、そんな自分が一体何なのかはまったくわかりませんでした。どうして、自分は女の子だと思わないのか、他の人たちとはどうして違っているのかを知りたくて、図書室でたぐさんの本を開きましたが、どの本にも書かれていませんでした。

高校生の頃、テレビドラマで性同一性障害のことを知りました。中学生のトランス男性が自分の声が嫌だと喉をフォークで刺したりする姿に、「この人は私ととても似ているけ

れど、何かが違う」と思いました。そのうちトランスジェンダーの友達が増えても、共感できることはいろいろあるけど、どこかで自分の違いを感じてきました。

私は女性でいなければいけないことや、女性として扱われることに耐え難い苦痛を感じましたが、かと言って男らしくしたいわけでもありませんでした。

大学生になっても相変わらず自分のことがわかりませんでした。ただ、女性として働くのはとにかく絶対無理だと思ったので、男性としてアルバイトをするようになりました。卒業後は小学校の教員になりました。カミングアウトして面接を受け、男性として小学校に赴任することになりました。周囲から男性として認識されて働いていると、すごく気持ちよく楽で初めて自分自身として存在することができるようになりました。それまで私はギリギリ女性の枠の中にいるために自分じゃない人の役をどんな時でも演じていたんだと初めて気がつきました。

でも、今度は男として働くならちゃんと男らしくしなきゃいけないというプレッシャーを職場で感じるようになりました。子どもの頃から私を苦しめていた女らしさ地獄がやっと終わったと思ったら、今度は男らしさ地獄なのか、私はどっちも嫌だと思うようになりました。



がほぐれていくのを感じています。

生理があったら女だな

私 はただ 私 でいたい

ずっと、どんな服は女っぽいのかとか、どんな仕事は男っぽいのかと考え、そこからこの人の前ではどうするのかとか、この場面ではどうするのかとか、いつもいつも考えてきました。でももうそんなことはやめて、自分はどんな人でいたくて、何が好きなのかを大事にしたいと考えるようになりました。

今は、自分を女か男かの枠に当てはめて考えるのはやめて、「私はただ私でいたい」と自分をノンバイナリーと表現しています。

20代の頃、私の身長や体つきや顔立ちや声や話し方や振る舞い方や普段は見えないはずの性器の形を審査されて、本当は女なんだと私のアイデンティティを踏みにじられることにいつも怯え、シス男性に比べて自分は劣っているとか、欠陥品なんだと感じて思い悩んでいました。

こんなにも私が私であることが尊重されずに生きづらいのは、何もかも間違っただけで生まれたからだだと自分を呪い、人生に絶望していました。

私の中に強いトランスフォビアがいつもありました。

でも、学びや人との出会いを通して少しずつ新しい価値観に触れていくにつれて、自分がほぐれていくのを感じています。

PERSONAL STORY

アンリ

小野アンリ

1984年、福岡県生まれ。

LGBTQ+ ユースワーカー。

なんて今はもう私は思っていないし、生理のある男性がいてもいいし、胸のある男性がいてもいいんだって思っています。そう考えると私は自分の体を恨まなくてすみ、スツツと解放されていくような気がしました。

女はこういう体でこういう存在だと定義し、誰が女で誰が男なのかを他人がジャッジする社会は、シスジェンダーの人を守るのではなく、実際はシスジェンダーの人も窮屈にし、苦しめることのある社会だと思えます。(ちなみに、これは、どんな身体の性的特徴を持つ人も女湯や男湯を自在に行き来していいということではありません。)

これまでずっと、シス男性のように見えるのが唯一絶対の目指すべきあり方だから、シス男性の人たちに近づこうとしてきたし、自分のどこがシス男性と違っているのかを自分自身でも(時には周囲も)あげつらってきた。でも、私はもうそんなことはやめたいと思っています。

今も私は、この服だと胸が目立ってしまうんじゃないかとか、今の声高くなかったかなとか、気にしてクヨクヨすることもたくさんあるけど、そんな時はいつも思い出しています。

トランスジェンダー、ノンバイナリーはそのままでも何一つ欠けていない、美しい存在だということ。

私は

性別を変えたから

幸せになったなんて

思いません

小

学生の頃に男の子を好きになり、しばらく自分はゲイだと思っていた時期がありました。10代の頃には私が男の子が好きなことはみんな知ってて「好きな男の子だれなの」と女の子と盛り上がりがあったりしていました。「じゅんじゅん」って呼ばれて、女の子っぽいキャラとして受け入れられて過ごしやすいかったです。

二次性徴で体毛が生えてくるのがイヤだったり、修学旅行のお風呂も、みんなで一緒に

入るなんてありえないと思って休んでいましたが、自分がなんでここまでいやな気持ちになるのかは分かりませんでした。トランスジェンダーだと気付いたのは仕事をはじめてからです。



芸能の専門学校を卒業し、ミュージカル俳優として劇団四季に合格しました。「表現の世界では自分らしくいられる」と思っていたのですが、配役は性別で決まっていた。舞台をいくつか経験したあと『ライオンキング』で男らしく力強く踊るハイエナダンサーの役を頂きました。髪は短く、上半身は裸。なんで他の人は普通に出来るのがこんなにつらく、こんなにも困難なのか分からないまま、この最大のチャンスは私はずから手離すばかりありませんでした。

ダンサーの能力を認めていただいたのに応えられなかったこと。今までの覚悟と努力。何処へもぶつけようのない憤り。恩師や家族への申し訳なき。退団にあたり、恩師の先生に電話をすると「じゅんの中でそれがそんなにつらいってことは、それだけ大切なことなんだね」とおっしゃってくれました。その言葉で、答えが出ました。21年間、自分の悩みや違和感を過小評価してきてしまったことに

やっと気付けたのです。

性同一性障害の診断書が出た後、家族にカミングアウトしました。

兄は「妹ができた!」と驚くほど好意的に受け止めてくれました。母は「何を言ってもやるんでしょ? 自分の力で全部やりなさい」と厳しくも自由にさせてくれました。父は他界してしまっていないのですが、いたらなんて言ったのか今でも想像します。

現在はトランスジェンダーであることを明かしてYouTubeとして活動しています。YouTubeに動画投稿を始めたのは、性別適合手術後に勤めていたアパレル会社を、性同一性障害と発達障害をカミングアウトしたときに失職してしまったからです。隠しても結局差別される世界なら、隠す必要なんてないと考えたから踏み出した一歩でした。

当初は大手事務所所属して動画を発信していましたが、再生回数が多いのはいつも身体やセクシュアリティの話ばかり。事務所からコンテンツに対する指示や強要があったわけではありませんが、再生回数の為に何を犠

PERSONAL STORY

じゅんじゅん

じゅんじゅん

1992年12月8日生まれ。劇団四季に入所し舞台を経験、現在はYouTube等のSNSでフリーランスとして活動している。

性にするのが分かり、それに応えられないと判断し早々と事務所をやめてフリーランスになりました。私はセクシュアリティを売りにして身体のことを面白おかしく話したくはなかったのです。それは私の女性としての意地かもしれない。今までのオネエ系笑う対象という構図にも飽き飽きしていました。今の私のYouTubeチャンネルでは、美容のこと、日常のVlog、お悩み相談、ゲーム実況など色々なことを自分らしくやっています。

女の子になって楽しい? と性別を変えたことのない人の多くは思うでしょう。

答えはNO。確かに着たい服を着て、したいメイクをすることなどは私にはとても有意義なものですし、法的に女性になったのは喜ばしいことです。

ですが、それは大半の人が生まれながら持ち合わせる当たり前の幸せです。

だから、私は性別を変えたから幸せになったなんて思いません。

私はずっとスタートラインに立ったのです。せっかく荒波を超えてスタートラインに立ったからこそ、私も他の誰もがそうであるように、生きがいのある豊かな人生を歩んでいこうと思っています。



自分の大切なことは
自分で選びたい

PERSONAL STORY

げん

鈴木げん

1974年、静岡県生まれ。

竹鞆職人。



治療をはじめたのは40歳のときです。ホルモン注射の1本目で生理がとまり、2ヶ月のうちにヒゲが生えた。声が低くなって、筋肉もついて、すね毛もふくらはぎまで生えるようになってうれしかったです。こんなことが自分の体にちゃんと起きていくんだという驚きと喜びですね。40代で治療することについて、インターネットで探しても情報がなくて不安だったのもありません。

治

情報のない中でずっと生きてきました。26歳のとき「3年B組金八先生」のテレビドラマを見て、性同一性障害を知り、病院に行こうと思って親にカミングアウト。その頃の保険証は家族共通だったので、精神科を受診したら地元の狭いコミュニティでバレると思ったからです。

返ってきた反応は「検査するの？ よくわからないけど、いいんじゃない？」しかし地元には専門医はおらず、埼玉まで行かないといけないことがわかり通院を断念しました。当時は、脳波や血液検査でわかると誤解していました。

同じ頃、高校の同窓会がありました。喫煙所でタバコを吸いながら友達に打ち明けると「男でも女でもげんじゃん」と友達が言うて

くれました。これはうれしかったなあ。「げん」という名前は子どもの頃のあだ名です。女性的な戸籍名ではなく「げん」と呼ばれてきました。中学校の卒業アルバムでも、高校時代に友達とやりとりした手紙でも「げん」。29歳で男性と結婚し、40歳で離婚しました。前夫にも「げん」と呼ばれていました。男だから女だからという性役割が薄い人だったので楽でしたが、離婚してようやく戸籍名を「げん」に改め、治療を始められるようになりました。

生まれてきてからこれまで自分を女だと思ったことは一度もありません。自分と同性だと感じる人に出会ったこともなく、恋愛対象は性別関係なし。20代の頃にはこんな変な性別の人は世界で自分ひとりだと本気で思っていました。

まだLGBTという言葉もなかったし、自分をごまかして生きるしかないと思っていました。最近になるまでどこかで諦めていたのかもしれない。4歳のときには気がついていたのに親が困る、先生が困る、周りに変と思われるって。

40代から治療をして名前を変えて、びっくりしています。こんなに生きやすくなるなんて！

現在はシスジェンダーの女性と交際し、浜松市のパートナーシップ宣誓制度を利用しています。彼女はとてもかわいい人。ライターとして男女共同参画についての冊子を作った経験もあってジェンダーの話もできるし、お互いに刺激し合える関係です。一緒にビールを飲みながら、彼女の作ってくれたつくねを食べている時間が幸せです。前の夫と離婚したときは、自分はこれからずっと一人だと思っていました。そのつもりで家を見つけたけれど、実はそうじゃなかった。家族ができました。

いま僕の戸籍の性別が男になっても困る人は誰もいません。でも、卵巣摘出をしていないため僕の戸籍は女性です。戸籍の性別だけが女であることで、むしろ周りが混乱する状態です。性同一性障害特例法には性別変更のために「生殖腺がないこと又は生殖腺の機能を永続的に欠く状態にあること」という要件があるけれど、これは不要です。自分の大切なことは自分で選びたい。その上で、大切な人たちとぼちぼち楽しく幸せに生きていきたいですね。



ワタシは

1人ではありません

野村恒平

1986年、山口県出身・山口県立聾学校卒業。

ろうLGBTQ+活動家。



PERSONAL STORY

ろう

ワタシはろう者で、第一言語は日本手話です。そして、ノンバイナリーで男性が好きです。

2歳になるまで両親はワタシの耳は聞こえないと思い込んでいました。「アーアー」しか言えないワタシを抱え、大病院で「恒平は耳が聞こえません」と診断された両親は、その頃を奈落の底に落ちて真つ暗闇の中にいるようだったと言います。

ろう学校で、大人になっても困らないよう口話教育を受けました。ワタシにとっては残酷な訓練でした。何かを伝えたい気持ちから手を動かすと「口話口話口話！」と厳しく怒られ、手を椅子の後ろへと縛られるようなプレッシャーでした。その頃のろう学校は手で自由にお話できない時代でした。うまく口話ができたら花丸をもらえ、口話で喋れたら優等生。誰かに認めてもらいたくてワタシも頑張りました。おうちに帰っても扉、テレビ、部屋全体に口話のカタチをしたシールが貼ってありました。熱心な両親に、我慢を強いられるきょうだい児の姉と兄。社会からの抑圧がワタシたちを苦しませていました。

小学部に入った頃、女の子のモノに興味を持つようになりました。姉や親戚とメイクごっこやままごとするのが一番の楽しみで、ワタシにとっての特別な時間でした。しかしカラダは成長し、中学生になると、男と女と

はつきり分けられるようになりました。男女で分かれるのが当たり前だと思う自分と、そこではない自分との葛藤がはじまりました。手話で自由に話せる学校は心地よくても、男の人を好きな自分が何なのかわからず、気持ちが悪く日々。インターネットで新宿二丁目の存在を知り、18歳のとき山口県から逃げるように東京へ家出しました。

スーツケースを引っ張りながら、ギリギリ光る二丁目をうろろするワタシの目に映ったのは男性同士が抱き合っていたり手を繋いでいたりする姿でした。小さい時から塞ぎ込んでいたモノが一気に解放されました！でも、ろうLGBTQの存在が可視化されてなく、情報がうまく得られず、自分の居場所がどこにあるのかわかりませんでした。ある人の紹介で、ろう者のトランスジェンダーと出会い「あなたはゲイなんだよ」とその人に教えられ、ようやく自分の存在が認められたと感じました。聞こえない人の中にも仲間がいたのです。

ゲイという言葉と出会いましたが、ゲイコ



コミュニティについていけない部分もありました。男らしさを求められる中で、筋トレしたり、筋肉を強調することでゲイに近づけるんだという安心感があった反面、どこかで違うような自分もいました。「らしさ」という言葉に縛られている日々を過ごし、うちという言葉はおかしいよ！女座りはやめたほうがいいじゃない！とか、コミュニティの中で男性として扱われ、男物のスーツを着て仕事に行くのも段々と嫌になり、自分は本当は女なのかなと悩みました。29歳のときに「第1回ろう×セクシュアルマイノリティ全国大会 in 東京」というイベントに参加し、そこで多様な性のろう者たちと出会いました。それをきっかけに自分の性自認について整理を始まりました。Xジェンダーという言葉を知り、もしかしたら自分はこれかも知れないと自認するようになりました。

ろうLGBTQの人口は本当に少ないので自分のロールモデルを見つけるのは大変です。LGBTQ聴者団体のイベントに参加したくても、話がわからず、ついていけません。「イベントに手話通訳をつけたらいい」と最初は思いましたが、そもそも日本手話には男女二元的な表現が多く、LGBTQについて適切に表現できなかったり、

「イベントに手話通訳をつけたらいい」と最初は思いましたが、そもそも日本手話には男女二元的な表現が多く、LGBTQについて適切に表現できなかったり、

「イベントに手話通訳をつけたらいい」と最初は思いましたが、そもそも日本手話には男女二元的な表現が多く、LGBTQについて適切に表現できなかったり、

今日もありきたりで
代わり映えのしない
幸せでかけがえのない
1日が始まる

PERSONAL STORY

りさ

河上りさ

1982年、大阪府生まれ。

焼き芋屋経営。

私

の1日は犬の散歩から始まる。
3年前の春、遠く離れた山口県から家族として迎え入れた2匹の野犬の子どもが、子どものいない私たち夫婦にとって子どものような存在で、遊びたい盛りの娘たちの散歩に季節に関係なく汗だくになりながら近所の漁港周りを歩くのが私の日課だ。
潮風に吹かれながら戯れついてくる娘たちと一緒に走って全力で遊ぶ。そのあとは、夫を仕事に送り出し掃除を済ませてから自分の仕事が始まる。仕事が終われば、夕食の買い出しと支度をして、夫の帰りを待って1日が終わる。

私の1日は、どこにでもありふれたもので、特に変わった何かがあるわけではなく「何か面白いことないかな」と思ってしまうほど、悪く言えばつまらないもので、よく言えば平和なものである。



「男のくせに気持ち悪い！俺に近づくな」と初恋の男の子に言われた6歳の頃から、当たり前に関わりを女の子だと捉えていた自分の中の当たり前が間違いなのだと思死に否定し、高校卒業までの間、周りの目ばかりを気にしながら、男らしさを演じ振る舞った。

18歳から入ったニューハーフという業界では、周りが求める女性よりも女性らしい男性、女装している辛口マシニングトークの面白い男好きな男性という周りからも仲間内からも求められるニューハーフ像を演じ振る舞った。「オカマになった以上、人並みの幸せなんて望めない。所詮オカマはオカマとして一人孤独に死んでいくだけ」仲間内からそう言い聞かされ、それから外れることが許されないうこか歪んだ時間を過ごした。

24歳からは女性として世間に紛れて自分の過去の素性を頑なに隠して生きてきた。6歳の頃からずっと否定し抑え込み続けてきた自分として、ようやく生きられた喜びの反面、生理や出産など女性特有の話題や結婚などに関わる機会に直面したときには女性として不

完全な自分を思い知らされる連続でもあったと記憶している。

31歳で5年付き合った男性と婚約という話になった際、相手方の父親の猛反対で、父親を説得できないと諦めた交際相手から一方的に別れを告げられた時がそうだった。誰にも打ち明けられないのだ。私の素性を知らない人に、それを話すということは自分の素性を明かすことになるため事実を曲げて伝えてはみるが、いったいなんの話をしているのかよく分からなくなる。その出来事を機に素性を隠して女性として生活することに違和感を抱くようになった。

そんな私の人生に変化をもたらしてくれたのは、ひょんなことから繋がることのできた同じトランスジェンダー当事者の夫や友達との出会いだった。

今私は、自分がトランスジェンダーだということをおープンにして付き合える友人もいて、半分オープン半分クローズドという生き方をしている。そんな生き方をする中で、男だった過去の自分も、女として生きる今の自分も、どちらも自分だと考えられるようになり、今では女性としての日常を当たり前に生きており、普段性別について考えることも殆どない。男性や女性である前に自分は自分だと言葉に出して言えるようになった。

振り返れば、性別というものに囚われてい

たのは他の誰よりも自分自身だったのだと思う。初めこそ不一致に苦しんだ性別だが、性別移行が進むにつれ徐々に移行後の性別が当たり前になり、次第にそんなことも考えなくなる。性の不一致が一致に変わるとは、こういうことを言うのだと思う。

元男性でもあり、トランスジェンダー女性でもある。誰でも何かしらのバックグラウンドを持っているのと同じように、私もそんなバックグラウンドを持つ世間一般に多数存在する中の一人の女性なのだ。

その辺の人と同じ日常を生きて、今日もいろんな人と当たり前ですれ違う。掴んだロープの先には娘たちがいて、隣で「何か面白いことないかな」とぼそっと呟く夫に「そんなもん、自分で探しに行かな見つからへんで！」と笑って突っ込む。そして今日もあきたりで代わり映えのしない幸せでかけがえのない1日が始まる。

こんな人生で幸せなのかと他人から聞かれたり自問自答する時もあるが、今私は胸を張ってこう言える。「幸せだ」と。



Q10 家族や友達にできることは？

その人が新しい性別で生きようとしていることを、ぜひ応援してください。次のことも役立つでしょう。

- 本人の希望する名前や代名詞（彼・彼女／苗字で呼ばれたいなど）を用いたり、くん・さんづけで呼ぶこと。分からなかったら質問し、これまで間違っていたなら修正しましょう。
- 本人の許可なく他の人に言わないで。その人のジェンダー・アイデンティティだけでなく、性別変更した事実や以前の性別、名前を知られたくないと思う人がいます。
- 「どこまで手術してるの?」「どんな体なの?」「どんなセックス?」「本物の女／男みたい」「本当の女／男らしく見せるには」「昔の写真みせて」みたいな無神経なことを言わない。求められていないアドバイスをしない。
- 性的指向を決めつけるのはやめよう。トランスであっても、好きになる相手の性別はいろいろです。またトランス女性を好きになる男性＝ゲイではないですし、トランス男性を好きになる女性＝レズビアンではありません。パートナーに関してあれこれ決めつけるのもやめましょう。
- 本人が使っている言葉を使いましょう。世の中にはトランス、オカマ・オナベ、元男子・元女子、オネエ系、ニューハーフ、性同一性障害 etc. いろんな言葉があります。他の人は平気でも、その人にとってはつらい言葉がたくさんあります。その人は自分のことをなんて表現していますか？
- 困っていることがないか聞こう。トイレ、服装、旅行のお風呂、人間関係など、いろいろあるかも。一緒にトイレに行ったり、困っていることがないか声をかけたりすると相手はほっとするでしょう。
- レッテル貼りをやめよう。トランスであることは「深刻な障害」とか「素敵な個性」とか、そんな単純な話ではありません。
- 性別を問わず使えるもの・楽しめるものを増やそう。男性だけ、女性だけの場を使えるトランスジェンダーもいれば、そうでない人もいます。性別を気にせず使えるものを増やせないか、書類にいらぬ性別欄がないか、忘年会のビンゴの景品を性別でわける意味はあるのか考えましょう。性別を問わないトイレを作るのもよいでしょう。
- 単に友達として「その人」との出会いを楽しんで一緒にすごしましょう。

Q7 性別は2つだけじゃないの？

ジェンダー・アイデンティティのあり方はさまざまです。あるトランスジェンダーの人は、自分自身を男性や女性であり「中間」ではないと捉えます。別の当事者は、自分自身のことを「男性と女性の中間」や「どちらでもない」「両方」「やや女性より／やや男性より」といった風に捉えています。性別のあり方は、個々人によって色合いが異なります。現代では欧米中心な性別二元論が主流とみなされていますが、絶対的なものではありません。インドネシアのブギス族では性別は5個、インドではヒジュラと呼ばれる「第三の性別」があります。サモア島、メキシコでも同様です。オーストラリアでは2011年に、パスポートの性別に男でも女でもない性別記載が可能となりました。性別をめぐる人々の考え方によって「数え方」や見方は変わります。

Q8 トランス男性は男らしい、トランス女性は女らしい人が多いのでしょうか？

人によります。ある人の服装や振る舞い、仕草がどれくらい男らしい、女らしいとみなされるかを表す概念を「性表現」と言います。「性表現」はジェンダー・アイデンティティとは別物です。「男らしい」とみなされやすいバイクや釣り、電車が趣味だというトランス女性もいますし、テディベアが好きなトランス男性もいます。メディアではトランス女性はお化粧品やハイヒールが好きだと描かれやすいですが、それらに関心のないトランス女性もいます。シスジェンダー（トランスジェンダーではない）の男女が多様であるのと同じです。

Q9 男とか女とか関係なく、その人らしく生きればいいのか？

だれもが自分らしく生きられる社会は理想的です。しかし、実際のところ、いま私たちが生きているこの社会は、24時間365日、執拗に、あらゆる場面で性別を問われ、それに沿った期待や扱いをする社会です。「男も女も関係ない」「性別なんて気にしないで!」と言い切ってしまうのには、性別はあまりに「ある人を構成する要素」として大きな部分を占めています。「その人らしく」が実現できるのは、その人のジェンダー・アイデンティティがきちんと尊重され、まっとうに扱われる場合だけです。

Q5 性別を変えるって大変ですよね？

たしかに大変です。職場や学校、家族、慣れ親しんだ友人関係、通りすがりの人との接し方などさまざまな環境や状況での立ち振る舞いが変わります。たくさん説明をする必要があったり、説明を避けるための工夫が求められます。治療する場合には身体への負担、お金、時間がかかります。しかし、トランスジェンダーの人が性別を変えるのには肯定的な側面もたくさんあります。ストレスが減り、豊かな人間関係を築き直し、はじめて自分の人生を生きているという実感が味わえるようになるかもしれません。それ以上に、性別を変えることは単に「必要」なことであって、その人にとって他に選択肢などありえないかもしれません。もしも、あなたが大切な誰かから「性別を変えたい」と打ち明けられたら、「大変なこと」を心配するだけではなく、その人にとってポジティブな意味があるということにも、ぜひ目を向けてください。

Q6 何を聞いてよくて、何を聞いたら失礼なの？

人によって異なりますが、単なる好奇心からではなく相手を尊重していることが伝わるよう心がけるとよいでしょう。お互いが疑問に思ったことや話したいことを、より安全にやりとりするために、以下の工夫は役立つかもしれません。

- 「答えたくなかったらいいけど」と前置きをつける。
- 「いい関係を作りたいから」ということを伝える。
- いま、そのことを話したくなさそうであれば、相手のペースを尊重する。
- 身体の状態（手術の有無）やセックスの話は、興味本位では尋ねない。

また以下のような質問は役立つかもしれません。

- なんて名前で呼んだらいい？（彼や彼女、「くん」「さん」はどうしたらいい？）
- 何かできることがあったら教えて。もし他の人から性別のことを聞かれたら、なんて言えばいい？
- 他の友達や家族にはなんて言っているの？
- おすすめの本とかサイトとかあったら教えて。

トランスジェンダーへのよくある質問と答え

Q1 トランスジェンダーと同性愛はどう違いますか？

トランスジェンダーは出生時に割り当てられた性別とは異なるジェンダー・アイデンティティ（自分はどのような性別である／ないという連続した意識のありよう）を持つ人を指します。同性愛は、恋愛感情や性的関心をもつ相手の性別（性的指向）が同性に向かうことを指します。ジェンダー・アイデンティティと性的指向はまったく別の事象です。トランスジェンダーの性的指向はさまざまです。たとえばトランス男性の一部は女性（異性）を好みますが、男性（同性）が好きな人も、恋愛対象の性別を限定しない人も、恋愛をしない人もいます。

Q2 トランスジェンダーはどれくらいの割合で存在しますか？

諸説あります。米国の2016年の調査では大人の人口の0.6%という推定値がありました。国内では大阪府が2019年に実施した調査で0.7%、埼玉県が2020年に実施した調査で0.5%というデータがあります。

Q3 トランスジェンダーになる要因は何ですか？

はっきりした要因は分かっていません。胎児期の脳の性分化に関係があると考えられる研究者もいますが、現段階では明確な根拠として断定できる段階にありません。

Q4 トランスジェンダーはどう性別を変えますか？

身体的な性別移行（p.19参照）の他に、名前や服装、髪型、周囲からの扱われ方を変えるなどの社会的な性別移行があります。どちらが重要であるかは当事者により異なります。社会的な性別移行ができれば身体的治療をしなくてもよい場合もあれば、とにかく身体的治療が重要な場合もあります。